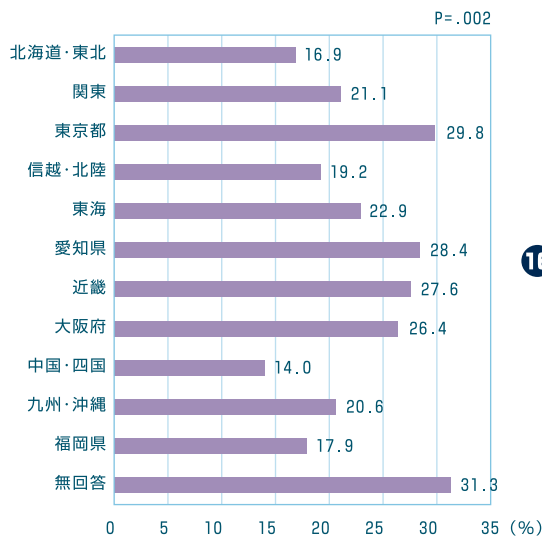


過去1年間のHIV抗体検査受検状況

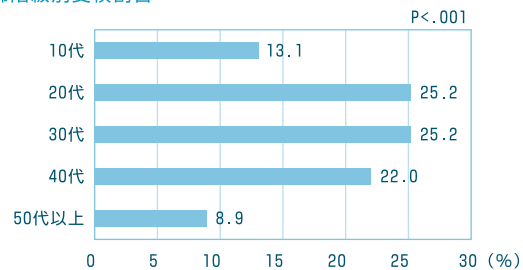
過去1年間のHIV抗体検査受検割合は全体では23.7%であり、居住地域によってHIV抗体検査受検割合に違いがありました¹⁴。また、年齢階級別では20代～40代は20%以上の受検割合でしたが10代と50代以上の受検割合は低率でした¹⁵。関東地方（東京を除く）、東京都、東海地方、大阪府、近畿地方などの都市部在住者の受検割合は20%を超えており、他地域よりも高い割合でした。受検場所は保健所が最も多く、次いで病院・医院、南新宿検査・相談室、夜間・休日検査、検査イベント、その他の順でした¹⁶。

10代のアナルセックス経験者のコンドーム使用割合は低く、HIV抗体検査受検割合も低いことが示されました。これらのことから、若年層に対する知識の普及やコンドーム使用を促すことと同時に、HIV抗体検査の受検を促進させることや若年層が受検しやすい検査環境を整えていくことも重要です。また、東京、名古屋、大阪などの都市部以外の地域における受検割合が低かったことから、地方においてはゲイ・バイセクシュアル男性が検査を受けづらい環境にあることが推察されます。検査環境の地域格差は正対策も今後急務であると考えられます。また、検査受検場所は保健所が最も多かったことから、ゲイ・バイセクシュアル男性の健康問題やそれに関連する心理・社会的要因について、重点的に研修する機会を保健師や看護師に提供することも必要な対策のひとつです。

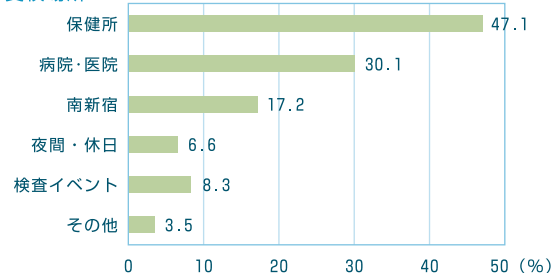
14 居住地域別受検割合



15 年齢階級別受検割合



16 受検場所



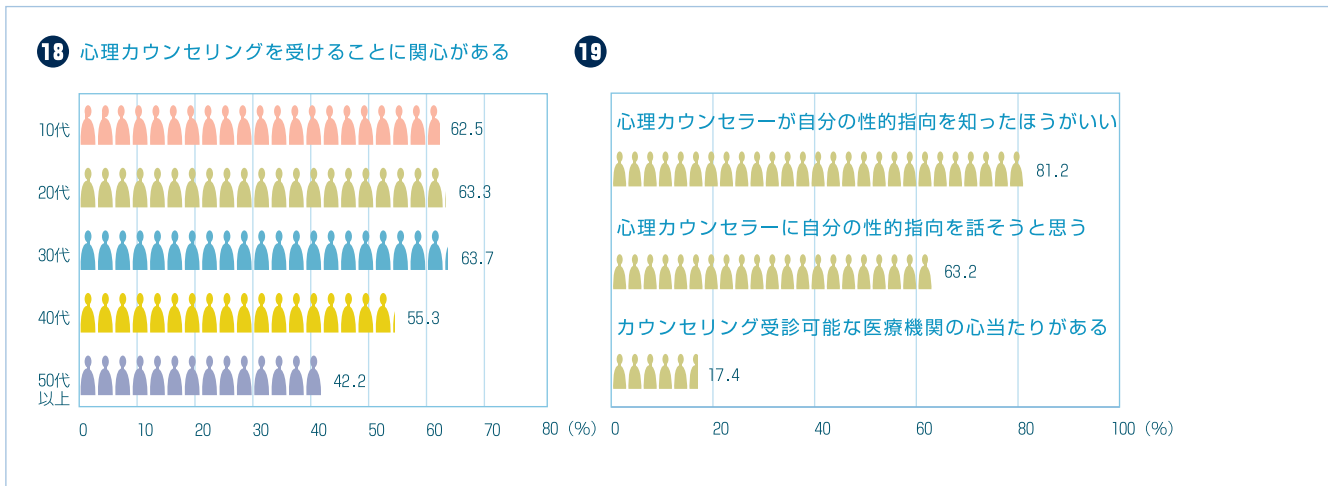
HIV感染予防行動とセックスに投影される心理

過去6ヶ月間にアナルセックスの経験があった人のコンドーム使用状況に応じて、コンドーム使用群（必ず使った＋使うことが多かった）と不使用群（5分5分の割合で使った＋使わないことが多かった＋使わなかった）に二群化しました。その上で、セックスに投影される心理とコンドーム使用の関連について分析したところ、セックスに心理的なことを投影している人のコンドーム使用割合は、心理的なことを投影していない人のコンドーム使用割合と比較すると明らかにその割合が低いということがわかりました¹⁷。コンドームを使用することよりもセックスの相手との関係性が優先されることや、コンドームがセックスの相手との親密さを阻害することがあると感じられていると言えるでしょう。あるいはコンドームを使わないことで、相手とつながりたい自分の気持ちを積極的に行動で表そうとしているとも考えられます。

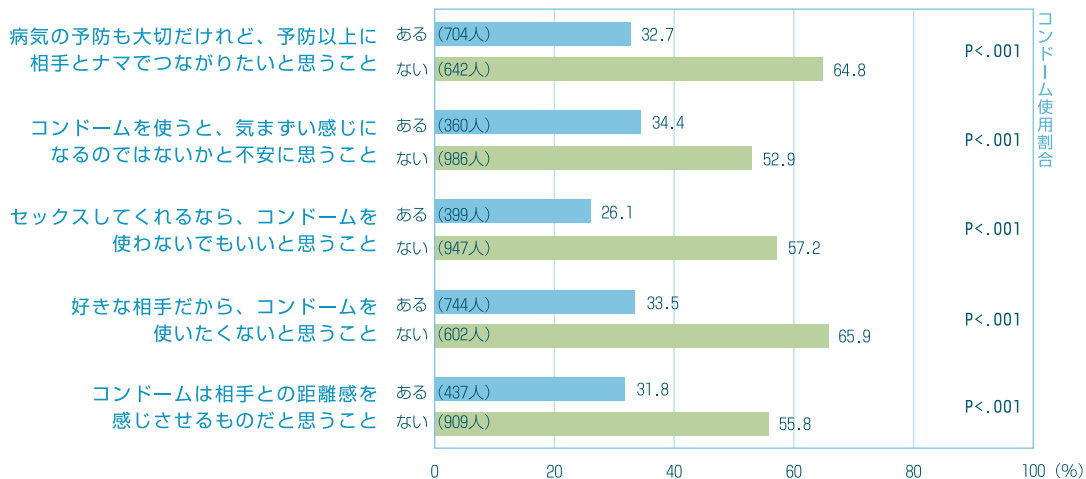
コンドームを使わない背景にはこのような心理的な理由があり、これによって選択的にコンドームを使わない現状があるものと考えられます。また、コンドーム不使用には自尊心の低さや孤独感の強さが関連していることも明らかになっています。

心理カウンセリングのニーズ

心理カウンセリングを受けることに興味がある人の割合は全体の62.1%であり、地域差はありませんでした¹⁸。また、興味がある人の80%以上が、心理カウンセラーは自分の性的指向を知った方がいいと考えており、63%の人が自分の性的指向を心理カウンセラーに話そうと考えています。しかしその一方、心理カウンセリングを受けることに興味がある人（1,281人）の中で、「心理カウンセラーに会って話ができる医療機関の心当たりがある」人の割合は17.4%でした¹⁹。このことは地域を問わず比較的若年層の半数以上が心理カウンセリングを受けることに興味があること、心理カウンセラーに性的指向を話そうと考えている人が比較的多いことが示された一方、実際に心理カウンセラーに出会える医療機関の情報まで持ち合わせている人はとても少ないという現状を示唆しています。これらのことから、ゲイ・バイセクシュアル男性が性的指向を明らかにした上で心理カウンセリングを受けることができる相談機関および医療機関などの情報データベースの構築が必要です。また、実際に相談があったときに十分に対応ができるように、性的指向やそれに関連するテーマについて心理カウンセラー自身が学ぶための研修プログラムの実施も急務であると考えられます。



17 セックスに投影される心理とコンドーム使用の関連(アナルセックス経験者)



自由記述欄に寄せられた声をまとめるにあたって

本調査研究の質問票の最後に設けられた自由記述欄には、全研究参加者の約32.1%に当たる661名が記述を行っていました。長文のメッセージも多く、原稿用紙数枚分に及ぶものもありました。この自由記述欄は、選択式の質問票に回答するだけでは表現しきれなかった思いを表出し、研究実施者に伝えたいという、研究参加者のニーズを受け止める役割を担ったことにもなると考えられます。またその記述内容は、本調査に参加した感想や研究参加者が日頃考えていることなど、非常に多岐に渡っています。これらの記述の多くは、医学系の学術機関に所属する研究者や心理カウンセラーがこれらの記述を読むという前提があったことによって、研究参加者が自分の心情を吐露する上での安心感が生まれたことや、同性愛社会に対する自分たちの思いの代弁者としての期待が託されたことを推測させるものでした。私たちが彼らの強い思いに心を動かされ、是非とも多くの方に当事者の声を伝えたいと考え、ここに報告する記述内容の分析とまとめの作業を行いました。

自由記述欄に書かれた全ての内容を、9つのカテゴリーに分類しました。9つのカテゴリーとは、「本調査の技術面に関する指摘や批判」「本調査の内容・テーマ・意図への疑問や批判」「本調査への期待・要望・感謝」「本調査による心理面・予防行動への介入的効果」「研究展開への期待」「日頃感じていること」「情報提供の希望」「その他」「分類不可能」です。本報告書では「日頃感じていること」のみ掲載しました。分類方法の詳細やその他の記述カテゴリー内容についてはホームページをご覧ください (<http://www.joinac.com/spirits-wave2>)。

